

った。

そして改めてもう一度考え直さなければならないと思ったことは日本の裕福さです。いくら不景気といっても、他の国に比べれば十分だと思いました。自分自身、改めて考えさせられた3日間でした。

石川県立金沢辰巳丘高等学校

1年 橋 篤史

今回、このプログラムに参加したことは、これからの自分の生き方に大きな影響を与えたいと思います。なぜなら、自分達の身近な問題や多くの国々が直面している環境問題についてしっかりと自分の意見を持てるようになったからです。

私達は「環境」というテーマで調べ、地球温暖化・酸性雨・砂漠化・オゾン層破壊・大気汚染などの問題がどのようなサイクルで起こっているかを発表したのですが、今までこの問題について考えることの重要性を知らず、たいした意見をもっていなかったということが自分の中の反省でした。でも、2日目にケーススタディを行って、前日に発表された、各テーマの問題点について、グループ全員の意見をまとめて、その解決法を考えていく中で、自分たちの考えをしっかりと持つことができるようになったのでとても良い機会になったと思います。

「ジェンダー」は身近な問題でした、男女の差別、例えば、日本では、男性が主に働いて家計を助け、女性は家事や子供の面倒をみる。これは、少しずつ改善されつつあるけれど、今だに、多くの面で男性が有利になっているので、これからもっと男女平等の世の中を作っていく必要があると思います。

「教育」では、我々の国では見られない問題なので、実感がわきませんでした。困っている他国の事情・経済（貧富の差）を知ったことで、その国の中だけでなく、もっと先進国や援助国の支援が必要であると感じました。

「エイズ」の問題は年々深刻になっているので、人々の意識を高めていく必要があると思います。アフリカだけで HIV 感染者がすでに 3000 万人以上、全世界では 10 億人もいるということに驚きました。また、日本でも、未成年者の間で急激に増えてきていることに、もっと HIV の怖さを伝える必要があると思いました。

今回、研修員とのふれあいや、他国の食事を体験したことで、海外の文化、いろんな国の人とのふれあいにとても興味をもてるようになりました。この体験をこれから自分が生きていく中で、自分だけのことを考えずに、世界には生

活することさえも困難な人がたくさんいるということをふまえて生きていきたいと思います。貴重な体験をありがとうございました。

1年 三木 亮

今回の高校生国際協力実体験プログラムでは、これまでに体験したこともないことを体験しました。ケーススタディーでは、他校の人とタイのパロー村という村について調べ自分達の意見をまとめ発表しました。タイのことで知ったことは、タイの山岳民族が8種族もあるということです。パロー村はとても不便な村で作物を町に売りに行きたくても道路の状態が悪く、さらに車を持っていない人がほとんどなのです。また学校もなく、教師もいないため、勉強が満足にできないので字の読み書きもできない人がたくさんいるのです。そんな村で私達なら何ができるのか真剣に考えました。私はたまに勉強がいやになることがあります。そんな村のことを知り、自分達は甘えていると感じました。

環境については「地球温暖化」だけを取り上げても、地球の様々な地域で砂漠化、海面上昇、異常気象等の問題が起こっていますがそれは全てつながりあっていることを知りました。

JICA についてその仕事の内容を知ることもできました。国際協力クイズでは、世界の文化の違いや興味深い建物のことも楽しく知ることができました。夜に行われた、研修員達との交流食事会では、世界各国の食事を食べることができたり、ビンゴゲームでは、研修員達と話すことができたりして仲良くなることができよかったです。国際協力に携わった人からその時の感想や経験した事を聞くことができました。ICAN の方からは一日目の夜に映画で見たフィリピンのゴミ山に住む人々の話について色々聞くことができました。小さいことから取り組んで人々のために取り組んでいることを知って感動しました。

私はタイに観光旅行で行ったことがあります。タイの全く違う面も身近に感じる事ができました。これからは身の回りのことをおろそかにせず問題解決に取り組んでいきたいと思っています。

1年 西田 沙織

国際協力とは何だろう、という疑問はこのプログラムに参加する前から私にとって大きな疑問であった。なぜなら私は将来、青年海外協力隊に参加したいと思っていたからだ。そして国際協力は難しい事ではない、自分の身のまわりの小さな事をやることで協力になることもあるんだという考え方はあったのだがいざ協力隊になると考えるととにかく本当に難しい事です。すごい知識や特技がい

るものだという先入観があった。だからこのプログラムにはもちろん参加したい気持ちがいっぱいだから参加したのだが、また参加しなければ、という焦りの気持ちもあった。

プログラム参加の初日から楽しいイベントがたくさんありとても楽しめた。そしてこんなにたくさんの人達が協力に興味がある、みんな真剣だとわかりすごく嬉しい思いをした。しかし不安はつもの一方だった。なぜなら、富山の高校の発表で英語だけを使ったものがあった。とても上手で自分とすごく比べてしまった。また二日目の研修員さんとの交流で満足できる程度には話せなかったことも不安の材料となった。

三日目、私の気持ちは劇的に変化した。国際協力に携わる人々と話そうというプログラムでお話を聞かせて頂いたからだ。そのおかげで協力隊といっても難しい事ではない、違う自分になって協力しに行くんじゃない自分のできる事をしていけばいいんだという事、大切なのはしたいという気持ち、興味をもつ事だということがわかった。つまり助けたいと思う純粋な心があれば協役に自然につながっていくのだと思う。だから自分にできることを見つけていきたいと思うし、このプログラムに参加できて本当によかったと思っている。

「交流会に参加して」

1年 西村 悠加

今回、この交流会に参加して、今世界が抱えている問題についてたくさんの事を知り、考えることができた。

私は「まず貧しい国の人達がゴミを頼りに生活している」ということを聞いたときは、すごくショックだった。私達がいらなくなって捨てた物（ゴミ）が、その人達にとっては生活の支え（宝物）みたいな物で、それを頼りにして一生懸命生きているのに、私達はいらなくなったら簡単に捨ててしまう、「ゴミに用はない。」という感じで恥ずかしく思った。この国と日本の差は何なんだろうと思った。

そんな時に、青年海外協力隊の方々のお話を伺って、自分にできるような簡単なことでも、たくさんの人達を助けることができると知った。一人でも多く「誰かを助けたい。」と思えば、貧しい国と日本の差が少なくなる（世界が平等になる）んじゃないかと思った。

大変なことばかりかもしれないけど、JICAの職員の方から「人の役に立てた時や、その人達が喜んでくれたときは本当に嬉しい。」と伺って、私も人の役に立てるような人になりたいと思った。そして、たくさんの人達の喜んだ顔に接したいと思った。そのために、今は自分に何ができるか考えていきたい。心の

温かい人になって、たくさんの人達を助きたい！！

研修員さんとの交流会はすごく楽しかった。

楽しみにしていた世界各国の料理もたくさん食べることができ、いろんな国の方々と楽しく話すことができ、大満足だった。外国の文化にも触れることができ、良い経験になった。

3日間は、あっという間に過ぎました。その中で本当にたくさんのことを学ぶことができ、この交流会に参加してよかったと思う。

富山国際大学附属高校

「JICA 研修を終えて」

2年 木嶋 環

私の学校は、土曜日などに“国際理解セミナー”というものを行っています。国際理解セミナーとは、大学の講師の方や、海外青年協力隊の方、地元で NGO 活動をされている方などに学校に来ていただき、お話を聞かせてもらうというものです。そのセミナーで何度となく JICA の事を聞いていたので、研修に参加できる事をととても楽しみにしていました。

JICA のセンターに着いて間もなく所長さんのお話などがあり、自己紹介、そしてそれぞれの学校が、1つのテーマについて調べてきたものの発表がありました。JICA 研修での一番初めの驚きは、各学校の発表内容でした。どの学校もとても詳しく調べてあり、全てが興味深い内容でした。その中でも特に印象に残ったのが“ジェンダー”についてのプレゼンテーションです。それまでは、ジェンダーについて真剣に考える事ありませんでしたが、他校の発表を聞き、男らしさとは何か？女らしさとは何か？そもそも男らしさ・女らしさとは何か？という事について、深く考えるようになりました。

研修の中ではケーススタディもあり、初めて会う他県の高校生と、世界が抱える問題について意見を交換する事もできました。普段の学校生活では、あまり地球環境や第三世界の問題について、同世代の人と話し合う事はないため、このケーススタディは「同世代の人にも、こんなに世界について考えている人がいるのか」と、とても嬉しく感じました。学校でも、ケーススタディのような授業が実施されれば良いなと思いました。

そして一番印象に残ったのはやはり、センター内にいる、実際に海外に行き、生活をしてきた人達のお話でした。いくらインターネットで検索をしても、いくら本を読みあさっても知る事のできない、生の世界を知る事ができた気がし

ます。

センターでの3日間はとても素晴らしいものでした。世界について深く考え、実際世界を見てきた人達のアドバイスを基に、自分が今後どのように生活していくべきかという事を考えさせられたような気がします。あるJICAのセンターの人が、こうアドバイスしてくれました。「世界規模で考える事はとても重要な事。でも、今すぐ世界の問題を解決しようとは考えない事。世界のために何ができるかではなく、今の自分にできる事の中で、何か世界のためになることがあるはずだから、それも見つけ、それを継続させなさい。」と。この言葉を聞き、本当にこの研修に参加してよかったと感じました。センターで学んだ事を忘れずに、これからの生活を送り、いつか私がセンターの人のように、若い世代の人達に胸をはってアドバイスができるような人間になりたいと思います。

「JICA 研修を終えて」

2年 岡嶋 あゆみ

国際高校には、週二回、国際理解という授業があります。この授業では地域紛争、宗教問題、南北問題など世界の諸問題について英語で読んで、英語で意見をまとめるのです。これは中学時代には想像もしたことの無い学習内容でした。この学習で私は地球には、私の想像を遙かに超える複雑で多様な問題がたくさんあることを知ったのです。授業を受ける中で、私は、世界の諸問題を直視して何らかの解決策を考えてゆくことの大切さに徐々に気づき始めました。

JICA の高校生実体験プログラムを担当から紹介されたのは、こういう問題について自分は何が出来るのかを考えていた矢先でした。JICA については名前しか知りませんでした。担当からこの団体が「青年海外協力隊」の母体だと聞かされて、今回のプログラムに、是非参加しようと思いを固めました。それは「青年海外協力隊」の体験者の話を聞く機会が、学校で何度かあったから協力隊の活動内容にたいへん興味があったからです。

プログラムの参加者は、同年代でありながら世界の諸問題解決のために何が出来るかという高い意識の人が多く、新鮮な驚きを感じました。特にプログラム初日の環境問題、エイズ、ジェンダー、教育についてのプレゼンテーションでは、各校の、真剣な取り組みに目を見張りました。それに比べると国際高校での授業のプレゼンテーションを手直しした程度で安易に参加した自分達が、ちょっぴり恥ずかしく思えました。二日目のケーススタディでは、グループ別にいろんな角度から、タイ北部のパロー村の状況を分析しました。そして収入、教育、生活を豊かにするための解決策を出し合いました。小さなグループ内でも様々なとらえ方があり、とらえ方それ自体には優劣がないということに気が

ついて強烈なショックを受けました。いろいろな考えを調整して、ちゃんと言葉にして書き表すこと、それを他のグループの前で、わかるように発表することは、やってみるとものすごく大変でした。でも、こういう具体的な作業をしないと考えは深まらないものだということも体験できました。今回の研修では、何事にも表面的な理解ではなくて、もう一步踏み込んで具体的に考えてみるということの大切さを、一番学んだような気がします。ものごとを一步踏み込んで考えてみることに、それを言葉にしてみることに、等身大の範囲で何が出来るのか行動してみることに、研修で学んだ以上の3つのことは、今回だけの思い出ではなくて、今後の自分自身の行動の指針になったと思います。最後に、私達のために、細かいところまで素晴らしい企画を用意して下さい、中部 JICA センターの職員の方々、特に興津さんに、改めて心から感謝したいと思います。

「JICA 研修を終えて」

3年 大巻 余吏子

“やさしい人間になる”ことが私の目標です。冗談で言っていると思われるかもしれませんが、“やさしい人間”には多くの意味が込められていて、人、動物、モノ、環境、そして地球にやさしくするなど、簡単なようで本当はものすごく難しいことなのです。

JICA の活動も“やさしさ”で成り立っていると思いました。私が今まで考えていた国際協力としての援助は、資金援助でした。私は、日本のような経済的に豊かな国は貧しい国に援助する義務がある、と考えていました。経済的に貧しい理由は単にお金がないからだとしか思いつかなかったからです。しかし JICA の活動のように、現地に何かの技術を伝えに行ったり、スポーツや音楽を教えに行ったりする“援助”の仕方もあることを知り、そのような“援助”はとても素敵なおことに思えました。日本が、お金さえ渡せば貧しかった国は豊かになる、という考えでいたとしたら、それは“やさしさ”ではなく、単なる善意の押し付けでしかないと思います。

そのことに気付くきっかけとなったのは、研修中のケーススタディです。日本で生活する私が、まったく違う生活をするパロー村の人々を理解するのは、並大抵のことではありません。学校を作って義務教育にするのが良いと私が思っても、教育の必要性に気付いていない村の大人にとっては、子供を学校に行かせることよりも家畜の世話をさせる方が、生きていくうえで必要なことでした。私が、良いと思ったことが必ずしも相手にとってよいことではないと気付かせてくれました。国際協力において一番大切なことは、自分が“何をしてあげたいか”ではなく、相手にとって何が必要かを考えることだと思います。相

手の立場になって気持ちを理解しようとするのが“やさしさ”です。だから私はもっと“やさしい人間”になりたいです。今回の研修に参加できたからこそ、再確認できた私の目標でした。

「JICA研修を終えて」

2年 村上 渚

世界には色々な問題があり、ときにその問題は生命を脅かすものになったりもします。しかし、私はそれらのどの問題も、何故かすごく遠く、ひとごとだと感じていました。私の周りにそういった問題を抱える人がいなかったし、実際、見たこともなかったからです。そして、世界の問題をひとごとのように感じているのは別に私だけではないんだろうとも思っていました。

けれど3日間のJICA研修で、JICA職員の方々や、青年海外協力隊に参加された方、そして自分と同じ高校生が真剣に世界の諸問題について考えているのを見て、私の中で色んなことががらりと変わった気がしました。他の国と比べてボランティア意識の低いと言われるこの国で、まったく知らない国に住む、まったくの他人のために働いている人がいるということに、改めて驚きました。そういう経験を積んだ方のお話を聞いていたら、大変なこともいろいろと多そうでしたが、話をする方々は皆、とても満足しておられて、いきいきと笑顔でお話されました。それを聞いていて、私は国際協力は現地の人々の為だけでなく、国際協力に携わることの出来た本人も含めて、みんなの為でもあるんだと思いました。

3日間一緒に学んだ同年代のみんなに対しても、驚きました。世界の諸問題をすごく真剣に考えていて、やる気があって、同じ高校生とは思えないほどでした。それに、日頃は高校生同士の意見を聞く機会なんてあんまりないので、すごく触発された部分が多いと思います。こういう考えもあるんだな、と自分の考えを見直すこともできました。何より、同じ世代の中にそういうやる気のある人たちがいるという事実が、心強かったです。

私が3日間のJICA研修で学んだことは知識だけではないと、今改めて思います。誰かの為に、何かしてあげたいという気持ち、そして誰かから学びたいという気持ち、それが、国際協力につながっていくのではないかと思います。この気持ちを忘れずに、そしていつかきっと私も、どこか知らない国に住む誰かの為に、何かできればいいなと思います。本当に、ありがとうございました。

(2) 教師レポート (原文まま)

第9回高校生国際協力実体験プログラム報告書

添付書類

1 資料 1 総括

2 資料 2 これからの国際理解教育への取り組み

所 属 愛知県立愛知工業高等学校
氏 名 山 口 初 一

第9回高校生国際協力実体験プログラム

- 1 主催 国際協力事業団 中部国際センター
名古屋市名東区亀の井2-73 Tel.052-702-1391
- 2 期日 平成15年8月25日(月)～27日(水)
- 3 目的 好奇心旺盛で多感な高校生がワークショップやケーススタディ、開発途上国からの研修員との交流を通して、国際社会が抱く問題について考える。
- 4 内容 「世界の教育・エイズ・環境・ジェンダー」をテーマに勉強会や討論会、外国人研修生との交流会を行う。

5 参加校

愛知県	愛知県立愛知工業高等学校 愛知県立東海商業高等学校 私立大成高等学校
岐阜県	岐阜県立斐太農林高等学校
三重県	三重県立津高等学校
静岡県	静岡県立長泉高等学校
石川県	石川県立金沢辰巳丘高等学校
富山県	富山国際大学付属高等学校

生徒 32名(各校4名)
引率教諭 8名

6 日程

別紙に示す。

7 新聞報道

当日に新聞社の取材がありました。中日新聞と朝日新聞の切り抜きを添付しました。

8 実体験の内容

(1) 第1日目(8月25日)

開校式

中部国際協力センター所長挨拶

JICAは、現在150カ国で活動している。

体験とは失敗の歴史である。この3日間を有意義に過ごして欲しい。

などのお話がありました。



自己紹介（アイスブレイキング）

担当 JICA スタッフの指導により名札を作り、決められたグループごとに自己紹介をしていきました。

違う学校の生徒同士がすぐにうち解けあっていきました。

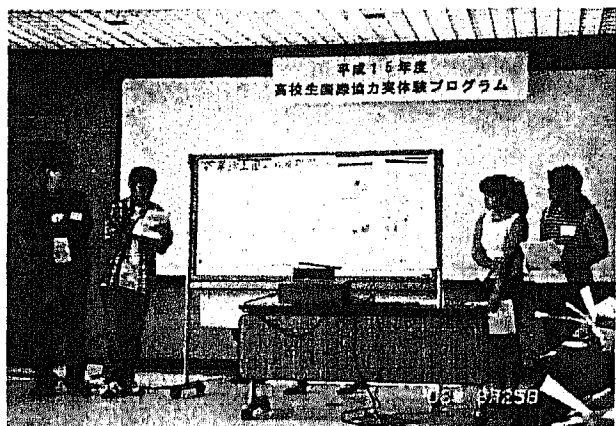


調べてきたこと発表会

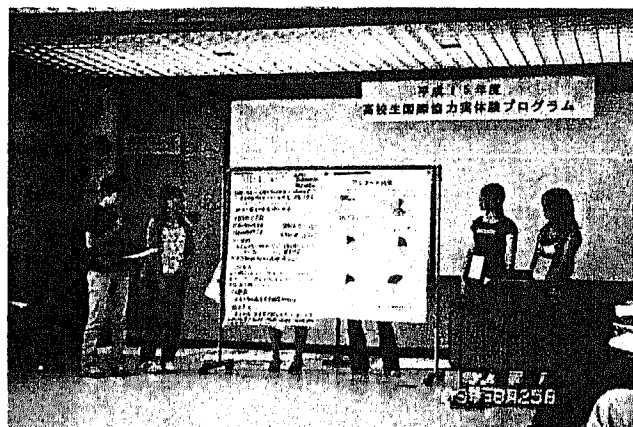
参加各校は、主催者から事前に発表テーマを与えられており、それについての発表内容を B 紙 2 枚に描き事前に郵送しました。

当日は、各校 10 分間の持ち時間で、自分たちが作成した B 紙に描いた資料を使い発表会を行いました。

各学校にテーマが決められており、本校のテーマは、「環境」でした。



本校の発表



岐阜県立斐太農林高等学校の発表

発表後、質問がいくつか出ました。「どうして子供たちのことを考えたのか」、「京都議定書についてどう思うか」などです。生徒が答えることができない質問には、国際協力事業団の職員のみなさんが答えてくれました。

京都議定書については、所長さんが答えてくれました。これからアメリカも必ず批准してくるだろう。あの 9. 11 の事件がなぜ起こったのかを考えると、そこには貧困が必ずある。アメリカは、自分たちがよければよいという考え方でなく世界がよくなるように変えていくことが大切であると考え始めた。ゆえに、世界の環境問題にも積極的になるであろう。

中には、この発表を全て英語で行った学校もありました。

愛知県立愛知工業高等学校の発表内容

テーマ 環境

地球には、砂漠化・森林破壊・大気汚染・水不足・土地の劣化・絶滅機器種などの環境問題が散在しています。その分布は、全世界に広まっており全体的には南半球に多く分布しています。

森林破壊は、世界の温帯林の4分の3と熱帯雨林の半分がすでに消失しており、過去10年間に急激に増加しました。この原因は、先進国の紙の消費の増加・割り箸の使用など我々の生活から来ていることも多くあります。

大気汚染は、過去20年間に見られた急速な都市化によりこの問題が悪化してきています。都市部に住む約10億の人々は、健康に害を及ぼしかねない量の細かいすす・亜硫酸ガス・二酸化炭素・一酸化炭素といった有毒ガスに毎日さらされているのです。さらに、年間240億トンの二酸化炭素が大気中に排出しておりこの温室効果ガスが地球の温暖化をもたらすのではないかと危ぶまれています。二酸化炭素の排出については、自動車や発電所さらに工場などから多く排出され、ここにも我々の生活から起因している部分があります。

一方、世界の子供たちも環境の悪化が原因で危機に瀕しています。

大気汚染の場合を考えます。3歳未満の子供は眠っている間に眠っている大人の2倍の空気を吸い込むために空気と一緒に汚染物質を2倍吸い込みます。子供は肝臓や腎臓や酵素系は十分に発達していないために大人のように効率よく汚染物質を処理できません。そのため、ガソリンに含まれる鉛や一酸化炭素、二酸化窒素、二酸化炭素といった気体が子供に及ぼす害は大人に及ぼす害より大きいのです。発展途上国で呼吸器系の疾患で死亡する5歳未満の子供は年間420万人にのぼります。

森林が減少し砂漠が広がり農地が浸食されて生産力が落ちると食料の生産が減少していくので子供たちが大きな被害を被っている国が跡を絶ちません。アフリカだけでも、栄養不足で成長を妨げられている子供は、約3900万人もいます。

きれいな水も発展途上国では不足しています。発展途上国の子供は全体の半分しかきれいな水が飲めません。従って消化器系の病気をもつ子供が多く、そのために水痘症やコレラを発病し死亡する場合も多く見られます。

コメント

これらの現実から、自分たちの生活は、発展途上国の人々の犠牲の上になりたっていることがわかりました。

私たちは、エアコンの温度を28度に設定したり割り箸を使わないようにするなど身近なところから努力をして地球環境を悪化させないようにしていきたいと思えます。

映画鑑賞

題名 神の子たち

上映時間 115分

フィリピンにあるパヤタスごみ捨て場に住む人々の生活を描いたドキュメンタリーフィルムである。ここに住む人たちはごみの中からお金になる物を収集しそれを売ることによって生活している。崩落事故により4ヶ月間ごみが集まらなくなった。その間は、人々は生活の糧を失った。様々な問題を抱える中で生まれる新しい生命、そして死。この映画には、そうした過酷な環境にも誇りを失わずたくましく堂々と生きる住民の姿が描かれていた。

夕食後の午後7時から9時までの企画でしたが、本校の生徒も眠ることなく最後まで鑑賞していました。この映画から生徒の心に響くものが何かあり、それがそうさせたのだと思いました。

(2) 第2日目 (8月26日)

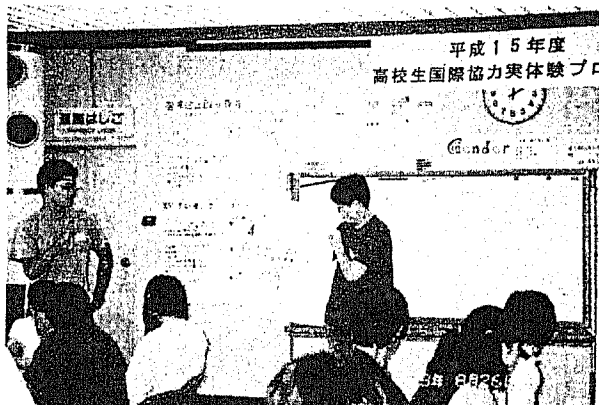
ケーススタディ

タイ王国のパロー村に派遣された青年海外協力隊の話をもとに、現地の生活と自分たちの生活を比較するところから始まり、彼らに対する援助のあり方を探っていきました。

参加各校混合でグループが作られ、テーマについて話しあい、その内容を紙にまとめます。



次に、グループ毎に発表します。もちろん、質疑もあります。



テーマが8個あり各班とも一人一回は発表していました。

発表を聞く態度もできており、我々教員も何の抵抗もなく同じことを行いました。生徒とよくうち解けていたと思いました。

JICA事業紹介、国際協力クイズ

簡単なビデオによりJICAの事業の紹介がありました。その後クイズを行い、これで民族衣装着付けの生徒を選んでいました。

研修員との交流食事会

生徒たちは、研修員に関係のある事柄がいくつか記入されたカードを渡されます。彼らは、研修員にインタビューして、カードの内容とあう物があれば、シールをもらいサインをしてもらいます。たくさんのシールとサインを集めると、後で商品がもらえるというものでした。

民族衣装を着た生徒たちで会場は華やかになる



と同時に国際色あふれ、その中で食事もでき、さらに英語で会話するという企画で、本当に生徒も異国の人々と楽しい一時が過ごせたことと思います。



交流食事会での自己紹介（英語で）



楽しい会話と食事

(3) 第3日目（8月27日）

国際協力に携わる人と話そう

参加者は3班に分かれて、3人国際協力に携わる方から30分ずつ話を聞きました。

- ・ 特定非営利活動法人（NPO）アジア日本交流センター
代表理事 龍田 成人
フィリピンの貧しい人・困っている人を助ける活動をしている。
- ・ JICA中部国際センター国内協力員
江口 由希子
トンガ王国の国でのダイエット指導の体験を話してくれました。



- ・ JICA中部国際センター総務課長
杉山 光男

ボリビアでの3年間の体験を話してくれました。特別なことをしなくても国際協力是可以ることを教わりました。



世界の食事を体験しよう（ブラジル）

ブラジルのサンパウロ市で青年協力隊として活動された古田さんの体験談を聞いた後、ブラジルのサルバドール市の料理を食べさせていただいた。

生徒も珍しい料理に楽しそうでした。



まとめの会

最後に、参加生徒1人1人が「自分の将来に誓うこと」と題して簡単なスピーチを行った。挙手をして自発的に発表しているところが印象的であった。

- ・自分たちが幸福なことがよくわかった。
- ・発展途上国の生活が大変であることがよくわかった。
- ・たくさんの人々の価値観を認めて、自分の価値観を押しつけることをしないようにしたい。
- ・自分のことばかりでなく他人のことも考えて生活したい。

などの意見が出ていました。

修了証書授与

JICA興梶業務課長より生徒一人一人に終了証書が授与されました。

引率者としての感想

今回はじめてこの国際協力実体験プログラムに参加してみましたが、参加した生徒たちが喜んでくれたので私は大変満足しています。

食事が出たり、異国の衣装をきたりするなど物理的な面もあると思いますが、それより同じ人間でありながら自分たちよりはるかに大変な環境でも立派に生きている人々がいることを知ったことが大きいと思います。生徒の心に、他人に対する思いやりや、違う価値観を素直に認める心がプラスされることで、今後の彼らの人生がさらに明るくなることを私は、信じています。

今回参加した生徒は、多くが国際コースに在籍していました。国際コースは、英語の単位数が多く、毎年国際的な催し（海外で活躍している人の講演・海外旅行など）を開くなど各学校で工夫しているようです。

また、総合的な学習に時間に国際理解教育のテーマを取り入れている学校もありました。本校は、課題研究で総合的な学習の時間を置き換えています。工業の専門教育も必要ですが、国際理解や環境など身近な問題を取り上げた科目もこれからは必要ではないかと思いました。



ウズベキスタンの研修員からプレゼントをもらった本校生徒

JICA職員と夕食



資料 2

これからの国際理解教育への取り組みについて

本校では、国際理解教育については全く取り組みがなされていないのが現状です。これは、文部科学省の示す学校教育の方針を遵守していないことになり残念なことであると感じています。しかし、教育課程からもそのような時間の確保は難しくこの事情も理解できるところはあります。

国際理解教育には、やはり今回のように実際に外国人と接したり、実際の現場を経験した人たちとの交流が必要であると私は思います。そのためには、外国語の教育も必要です。しかし、言語教育だけではそれだけが先行し本来のコミュニケーションツールとしての言語の働きが見失われることもあると私は考えます。この点で、今回の企画は意味があると思います。

我々教員は、学校を移動いたしますのでこの経験を別の学校でも生かしていきたいと思っています。もちろん、本校でも機会があれば国際理解教育を積極的に推進していきたいと思っています。

「平成 15 年度高校生国際協力実体験プログラムの総括および開発教育について」

愛知県立東海商業高等学校 商業科教諭 山本 智彦

1. はじめに

昔から青年海外協力隊の活動には興味があったものの今までは国際理解（開発）教育にあまり縁がなかった私ですが、昨年 11 月 ODA 民間モニターの教員特別枠で中国へ。今年 8 月 JICA 主催教師海外研修でケニアへ行く機会を得ました。そして、この実体験プログラムへの参加。参加生徒だけでなく、引率教師にとっても貴重な体験になりました。

2. プログラムの総括（感想・意見等）

下記の文章は実体験プログラム終了後、今回の主催者である国際協力事業団（ジャイカ）中部国際センターへの感謝の気持ちを込めて中日新聞に 8 月 27 日投稿した原稿です（残念ながら採用されず 9 月 10 日現在新聞には掲載されていませんが）。

8 月 27 日付本紙県内版で紹介された国際協力事業団（ジャイカ）中部国際センター主催の高校生国際協力実体験プログラムに生徒 4 名と共に参加した。2 泊 3 日の日程で、中部・北陸地区から 8 校の高校が集まり全体では引率教員を含め 40 名の参加者がワークショップやケーススタディを通じて途上国問題を考えた。また、学校の平常授業では中々体験できない青年海外協力隊経験者・ジャイカ職員・NGO（非政府組織）関係者・途上国からの研修生等との交流で途上国の実態を直接聞く事ができ国際社会が抱える問題を考える良い機会になった。参加した生徒達は積極的に各課題に取り組み日頃の授業では見せない素敵な顔を皆していた。教師として、実体験の伴う「本物の授業」に学ぶべき所が多かった。ジャイカは 10 月に独立行政法人化されるが今後も教育現場と連携し国際理解教育を推進してもらいたい。

—感想・意見等（箇条書きで）—

- ・ 生徒にとって有意義な企画なので毎年継続して参加できるシステムを考えて欲しい。
- ・ 時間を充分にかけた「ケーススタディ」は生徒達の素晴らしい一面が見る事ができ良い企画であった（教員班のできが一番悪かった）。
- ・ 「研修員との交流食事会」はワールドビンゴのアイデアが良かった。シールだけでなく、簡単な写真入の名刺を皆（生徒も）が持参し交換し合うと更に盛り上がる。
- ・ 「国際協力に携わる人と話そう」は時間不足で十分な話が聞けず残念であった。特に NGO 方の話は 1 時間以上必要。
- ・ 「教師と JICA 職員との懇談会」は、1 日目の夕食時に十分な時間を設定し

本音が出し合える状況を作った方が良い。今回はお互いに疲れている中で十分な時間ではなかった。

- ・ 全日程が生徒と教師同じでなくとも良いのでは？ 8割合同で2割は別のプログラムの方が合理的・効果的な場合もある。
- ・ 校内での報告やPR用に撮影された写真やビデオ等を是非欲しい(有償でも)。

3. 国際理解(開発)教育への今後の取り組み(箇条書きで)

- ・ サーモンキャンペーンやNGO等を活用して校内で開発教育の実践を行なう。
- ・ エッセイコンテストへの積極的な参加(今年度から)。
- ・ JICA中部国際センターへの生徒訪問の検討(実体験プログラムのショートバージョンができないか?)。
- ・ 次年度、3年生の授業「課題研究」(総合学習の時間)で講座開設の準備。
- ・ ODA 民間モニター・教師海外研修・実体験プログラム等の職場への宣伝・還元活動。

4. 国際協力事業団(ジャイカ)中部国際センターへの要望等

- ・ PR不足を解消する為、県教育委員会やマスコミ(テレビ・新聞)との連携を強化する。
- ・ 行事案内等の発送文書は学校長名と個人名(関係教師)で送付する。
- ・ 中部国際センターのホームページへ各行事の予定だけでなく、行事後の報告(様子がわかる写真や参加者の感想等)を掲載する。
- ・ 現職教師の長期研修生(1年または2年)の受け入れを中部国際センターでも行なって欲しい(すでに事例がある場合はその紹介をして欲しい)。

5. さいごに

英語が苦手な商業科教師になった私が途上国を中心とした国際理解(開発)教育にはまりつつあります。今まで、地域や職場で特別な活動をしていた訳ではないですが自分にできる事から少しずつ何かを始めようと心に誓わせるものが一連の企画の中にはあった気がします。本当に色々お世話になりました。現在、国際経済科を設置している商業高校では途上国への修学旅行を実施しているところもあります。今後はJICA中部国際センターと連携して研修を深め、商業高校独自の国際理解(開発)教育を開発し実践していくつもりです。これからも宜しくお願いします。

『高校生国際協力実体験プログラム』に参加して

大成高等学校教諭 武井 隆義

開発教育を通じて国際理解を深めようというこのプログラムに参加して、まず生徒に国際協力の必要性を説くスタッフの方々の熱意と、それぞれの方が赴任した国のことを本当に理解し、好きになって帰国されているということに、協力隊OBとしてたいへんうれしく感じました。プログラムの内容も「調べてきたこと発表会」など生徒の積極的な姿勢を促すものが多く、有意義なものでした。途上国からの研修員も参加しており「交流食事会」などで意見を交わすこともできましたが、ただ彼らからの視点で国際協力を論じる場もあればと思いました。

特に「ケーススタディ」では現地での協力のあり方について自分と違う意見を聞くことができ大変参考になりました。また、話し手と聞き手が一方通行ではなく、全員で考え意見をまとめる能力、リーダーシップなどを育てる面で教師としても勉強するところが多くあり、今後の生徒への指導方法の参考になりました。

思うに、途上国、特に辺地における活動で大切なことは協力隊員がその地を去ったあと、住民が身につけた技術・教育等を維持すること、また住民の力でそれを発展させることではないでしょうか。隊員がいる間は官民が協力し、また援助のおかげで経済的にも潤いますが、その後いなくなるとまた元の生活に戻ってしまう場合もよくあることで、住民自身の意識が変わらなければ結局はその繰り返しになってしまうような気がします。そのためにも彼ら自身が自立し、そこに住む人々の手による住民のための社会ができるよう、意識的な指導が必要であると思います。

また、発展途上国、先進国と国を色分けするのではなく、すべての問題はリンクしていて、途上国の問題はすなわち先進国が作っているということがよくわかりました。包括的な解決策というものはないが、その一つ一つを解決する方法を考え、日々の生活に役立つ実情に応じた細かな援助から取り組むことが重要であることがわかった気がしました。

私自身も含めて、自分を他人に理解させる能力が必要であり、それが今の学校教育に足りないことであると常々考えていました。今ではわかっていますが、それを教育の場でどうしたら高めることができるのか悩んでいましたが、今回のプログラムに参加した生徒に国際理解教育の必要性を説くと同時に、協力隊OBとして同僚教師たちへの啓蒙活動をしなくてはと感じました。

「高校生国際協力実体験プログラムに参加して」

岐阜県立斐太農林高等学校教諭 菊池 徳隆

国際協力事業団中部国際センター(CBIC)主催の高校生国際協力実体験プログラムに本校生徒4名と共に参加し、開発教育や国際協力について理解を深める貴重な機会をいただき感謝します。私も以前からこのプログラムに参加したいと興味を持っていたので生徒たちに話したところ、すぐに希望者が集まりました。生徒たちがこんなに興味を持ってくれるとは思っていませんでしたので、正直に言っていると驚きました。3日間というとても短い期間でしたが、生徒たちは未知の経験の数々に躊躇することなく、楽しみながらアクティビティに参加し、視野を大きく広げてくれたと思います。

さて、本プログラムの中で生徒たちの一番の衝撃は、フィリピンでのドキュメンタリー映画「神の子たち」だったようです。第2のスモークーマウンテンと呼ばれるパタヤスゴミ捨て場での崩落事故と、その後の極限状態での人々の生活は、我々の想像を絶するにもかかわらず、現実の映像として目の前にありそれが我々と同じ人間の生活であったことは、「生きる」ことの生々しさを伝えてくれたと思います。これは途上国の中でもかなり特殊な状況だという説明もあったのですが、生徒たちの衝撃はとて大きく、頭の中では貧困が強調され過ぎて、家族の絆や、彼らの前向きな生活がどれだけ伝わったのかと言う点は気になりましたが、このような環境もあるのだと「知っている」ということはとても大切だと思います。

今回の実体験プログラムは、事前学習の4つのテーマがケーススタディの青年海外協力隊疑似体験の中にうまく関連するように考えてあり、また、NGO 団体 ICAN の代表者の話などから、現場に立ったときに初めて分かる援助の難しさも同時に考えさせるなど、3日間を通して総合的によく練ってあると思いました。生徒たちはグループになって他校の生徒と協力しながら作業を進める形で行われ、次々と与えられる課題は、時間制限があり考えることと話し合うことが要求されたのですが、非常に前向きに取り組んでいる姿が印象的でした。我々も自らの授業の展開を考える上で是非参考にしたいと思います。

プログラムの後半で、ある生徒が「外国人に日本のことをいろいろ聞かれたら、ほとんど答えられなかった。以外と自分は日本のことを知らなかった。」と発言したことが印象に残っています。「開発」や「援助」を考えるより前に、まずは「交流」して、お互いを知ることが大事だと思いますが、そのためには「自分自身を知ること」も大切なのではないのでしょうか。

また、参加生徒たちの言葉の中で少し気になっていたこともありました。それ

は「援助する」や、「何かしてあげる」といったような言い回しです。今回のプログラムの中では開発途上国の人々に対して、JICA 或いは NGO という組織が関わっていく形の話が多かったので、その感覚が生徒たちの意識の中に残ったのだと思います。研修員との交流会では、人と人同士として、対等な立場で話をしていただいていたのではないのでしょうか。

まとめの中で、生徒たちの感想の中に「自分たちに出来ることから」と言った言葉がありましたが、その1つとしてまずは色々な国の人と接する機会を持ち、知人・友人をたくさん増やしてもらいたいと思います。「お互いを知る」事ことから、尊重しあえる人間関係と作りや開発途上国への理解を深めてもらいたいです。

このプログラムを終えて生徒たちは大きく意識を変えて帰って来ることが出来ました。

今回のこのすばらしい体験を思い出にしまわぬでなく、ここを始まりとして、新たな行動への礎となることを期待します。また、私も今回の経験を生かして、開発教育の中で生徒たちを支援するように心がけたいと思います。

最後に繰り返しますが、今回このような機会を与えていただき本当にありがとうございました。

「自分を磨いて、世界にはばたこう」

浦井 裕子（三重県立津高等学校 教諭）

生徒32名、引率教員8名に対してスタッフが28名というすばらしく恵まれた研修でした。しかもそのスタッフのほとんどが、普段あまり馴染みのないアジア・アフリカ・南米などの国に赴任経験がある魅力的な方々で、それぞれからじっくりお話を伺ってみたいと感じた程でした。

プログラムは全てがよく計画・準備され、運営に関わったスタッフの方々に、頭が下がる思いでした。初日の発表会では、本校生徒はジェンダーについてのプレゼンテーションを行いました。事前準備を通してこのトピックについて知識・関心が深まっただけでなく、当日多くの人前で発表すること自体が貴重な経験になり、自信へとつながったようでした。また、各校それぞれの個性あふれる発表を目の当たりにし、自分達もがんばらねばと励まされたことでしょう。

ケーススタディでは、生徒達が自主的に話し合いを進め、話し合った内容を手際よく模造紙にまとめている様子に感銘を受けました。私たち教員グループが知恵を出し合い、時間ぎりぎりまでかかって完成させたものよりも、生徒達

の作品の方が数段立派な出来ばえでした。また、どの参加者も生き生きと活動に参加している姿をみて、普段の授業の在り方を反省させられました。

二日間に亘るケーススタディの中で興味深かったのは、「ゆとり」に対する捉え方が、様々だったことです。タイの山岳民族の子供達よりは、自分達の方がゆとりがあると述べたグループもあり、意外な気がしました。

これらの話し合いや発表を通して、「豊かさ＝幸せ」とは限らないことや、「学校で勉強できる喜び」に気づかされた人も多かったのではないかと思います。

この他にも国際協力クイズや、研修員との食事会、民族衣装の着付けやブラジル料理の体験など楽しい行事も盛りだくさんでした。特に、センターに滞在中の研修員の方々との交流は心に残ったようで、世界には多様な文化や言語を持つ色々な人々が存在することを身体で実感できたようです。

最終日には国際協力に携わる三名の方からお話を伺うことができました。それぞれの立場は異なるのに、どの方も「日本の価値観の押し売りはだめだ」ということを体験を交えてお話下さいました。また、「国際協力は自分の良さを磨いて、出来ることから始めることが大切」ということも、異口同音に強調されていました。

今まで、国際協力に関心はあっても、何から初めていいのか戸惑っていた大半の参加者がこの言葉を胸に一步一步前進していくことを期待したいと思います。

私自身も、今回の研修を通して、国際教育を一つのジャンルとしてはっきりとらえることができるようになりました。また、生徒主導で行う具体的な授業方法もたいへん参考になりました。今回学んだことを、今後授業やHR活動の中で生かしていきながら、生徒達が世界に目を向けていく手助けをできれば、と考えています。

すばらしい三日間を本当にありがとうございました。

「実体験プログラムに参加して」

静岡県立長泉高等学校 教諭 小柳 明良

今回初めて実体験プログラムに参加して、気づかされたことが大きく分けて二つある。一つは「国際理解教育（開発教育）」の手法と生徒の関心意欲を引き出す方法である。二つ目は、生徒の可能性の大きさである。

まず、国際理解教育の手法であるが、これまでの自分の取り組みはどうしても「生徒に何か分からせなければ」と形のある答えを求めすぎていたと感じた。所長のお話の中に「答えのない」というような表現があったが、まさに国際理解・協力とは、自ら考え、行動することが大切であると気づかされた。とかく

「正答」と追い求める時代に、「外国へ！」という気持ちが低いのは、正答が出ない＝（イコール）自信がないという公式に縛られているからではないかと感じた。正答は一つではなく自分の意見が正答であるということに気づき自信を持つことができれば、それは行動につながると実感した。自分で考え行動する大切さを知った生徒たちは今では本校で毎年2学期に行われる「国際理解講演会（前半は生徒の発表、後半は外部講師の講演）」において、自分たちが実体験プログラムで感じたことを全校生徒に伝えるために発表したい、と申し出て準備を始めるほどになった。正答を求めることに従事しない多くの手法を学ぶ必要があると感じた。

二つ目の「生徒の可能性の大きさ」では、普段学校では見ることのできない生徒の姿を見ることができたのが大きな収穫であった。今回本校から参加した4人の生徒は、明るく、素直で、将来、国際や語学方面の大学へ進学を希望している生徒ではあるが、何分積極性が低く、人見知りをするので、私自身は参加前はかなり心配をしていた。しかし、与えられた課題に取り組み、発表の練習をしている姿は生き生きとしていて、これなら大丈夫だと確信を得た。実際、センターでの活動が始まると、自ら班の代表としてコメントをしたり、疑問に感じたことを休み時間に投げかけてきたり（解答に困るものが多かったが）その姿勢や成長は見ていて嬉しいものであった。また、ケーススタディにおいて教員チームが「これは生徒からは絶対に出ないアイデアだろう」と自負していたものが次々と生徒側から発表され、うかうかと傍観しているだけではいけない雰囲気は漂いだしたりもした。生徒には大きな可能性と力があることに改めて気づかされた研修であった。

以上の2つの点から、私ができるこれからの取り組みを考えてみたが、まず一つ目は、まだ経験の浅い教員としては、多くの手法を学ぶことである。今後このようなプログラムなどに積極的に参加し、また研修や経験や書物を通じて多くの知識を得ていきたいと思う。そしてそれを次代に伝えていくことが私の役割であると思う。二つ目に、生徒の可能性を伸ばすことにあると思う。生徒には多くの可能性があるが、現状はその力を発揮しにくい状況であると言える。どれだけ多くの知識を持っていても、積極性がなければその知識や意欲はもったいないことに出し惜しみされてしまう。逆に、積極性があれば多少の知識不足は現場でバイタリティとやる気で補えるものであると思う。

本校は幸い留学生の受け入れや海外語学研修、国際理解講演会や教科「国際理解」があるなどと「国際」への取り組みは活発なほうだ。これらの多くの機会を十分に活用し、生徒に豊富な知識と関心と意欲を持ち、積極性が養われる舞台を用意していきたい。

「JICA 高校生実体験プログラムに参加して」

石川県立金沢辰巳丘高等学校教諭 田辺 すが子

今年の春から本校でも総合学習がはじめて導入されている。1年生の担任、副担任を中心に昨年度から何時間もかけて話し合いをし、実のあるものにしようとして真剣に取り組んでいる。本校は普通科の中に普通コース、芸術コース、外国語コースがある。その中の私は外国語コースの総合学習を担当している。外国語コースはこれまで異文化理解と自己発信の力を養うことを目標として、科独自の様々な行事を行ってきた。例えば1年次には日本文化理解として茶道、日本式庭園の鑑賞、異文化理解としてハロウィーン、クリスマス、2年次には17日間のオーストラリア語学研修がある。また、1年、2年とも英語のレシテーションコンテスト、スピーチコンテストを行っている。そんな各種の行事を総合学習のなかで、一連の有機的な学習として新たに位置付ける、というのが今年度の課題であった。

今年度1学期には日本、石川、金沢の文化、行事を知るということをねらって、グループによる調べ学習を行った。生徒たちは予想以上に自発的に楽しそうに調べ発表を行った。2学期には目を世界に向けさせる取り組みをしたいと思っていた。そのために1学期の終わりには新聞の中から外国の記事を選び出し日本と世界とのつながりを考えさせる試みを行った。そして、世界平和に貢献したり活躍したりしている人々や団体を2学期には取り上げてみようと思っていた。そういう時機に参加への案内があったわけである。ちょうどタイムリーではあった。しかし、このプログラムについては国際交流協会の方から案内があるまで全く知らなかった。また、JICAについてももちろん名前は知ってはいたが実際にどういう活動をしているのかはほとんど知らなかった。そういう私だったから案内があったときにはとにかく生徒には知らせようという気持ちであった。すると数名の生徒が声をかけたとたん、すぐに関心をもち参加を申しでてきたのである。これには驚きもし感心もして、正直この時期の引率のことを考えると後戻りもしたくなる気分であった私を参加に向け動きださせることになった。

体験セミナーについてはアンケートでも記したとおり、とても有意義であった。生徒は、積極的に自分の意見を発表したり質問したりして生き生きしていた。生徒は他では得られないような体験をし、世界を身近に感じたことと思う。この体験は生徒たちの心の中で熟成され将来の生き方に必ず影響を与えるものと思う。また、私にとっても生徒ともども各種のプログラムに参加できたことはとてもよい刺激になった。それは2つの観点からで1つは教師として今後生徒への指導の際に役立つであろうということである。ケーススタディ

ではその方法や発表のさせ方、評価の仕方など実際に体験してとてもよく理解できた。プログラムはきちんと配列されその内容についても用意を整えられてあったことにもとても学ぶものがあった。もう一つは誠意をもってまっすぐに問題に取り組んでいらっしゃる人々と接することで自分自身の考え方や今後にも元気がもらえたということである。国際協力に携わる方のお話はとても興味深くもっと長くお聞きしたかったものばかりである。またわずかな時間ではあったが日本に研修に来ていらっしゃる研修員の人たちとの交流も楽しいものであった。一生懸命国のためや、人々のために取り組んでいる人々と接することができて、研修センターのなかで世界はひとつであることを感じる事ができた。最後にこの研修に誠心誠意取り組んだ私たちにこの時間を与えてくださったセンターの皆様から感謝を申し上げます。

「これからの開発教育」

私立富山国際大学附属高等学校教諭 林 要昭

そもそも国際理解教育、異文化理解教育、開発教育の定義も類似点も相違点も知らない私に「これからの開発教育」を語る情報もアイデアもあるはずがない。そこで、今回 JICA スタッフから受けた好印象を題材に「開発教育」なるものの中でいかにスタッフの持つ力の結集が大切かという点に絞ってプログラム成功の要因について自分なりの感想を述べることにする。

今回の高校生実体験プログラムを支えた JICA 中部センターのスタッフの面々は、その準備周到さといい、連携のよさといい、職員間の軋轢の少なさといい、われわれ教師とは似て非なる世界の住人であった。私は、まずその事実には驚愕した。教師とは自分は手を汚さずに済むよう極力逃げ回り、そのくせ指示と批判だけは十分に、狡猾に権威をちらつかせながら常にお山の大将でいようとする人種である。私の勤務校に JICA スタッフを 3 人スカウトすれば学校の雰囲気は見違えるように良くなるだろう。私は教師と JICA スタッフの差にそれくらいのショックを受けた。センターには所長から研修員まで、全スタッフに笑顔とエネルギーがみなぎっていたからである。ひょっとして我々の前だけということはないかとちょっぴり意地悪く観察してみたがスタッフに言動の矛盾はなさそうだし、人間関係にもジェンダーにも軋轢はなさそう。さすがに素晴らしいスタッフである。あとは彼らが高校教師ではないということだけが多少気がかりだった。スタッフは一体どれくらい、昨今の冷めた高校生の実態を知っているのか心配だからである。話に乗ってこなかったり、活動に消極的だったりした場合、二の手、三の手はあるのだろうか。引率者としては、出来の悪い我が子の学習参観に居合わせた親の心境であった。

学校現場にも「総合の時間」など、教師でない人に授業に出てもらう企画が増えている。ただし話の内容によっては、高校生は寝てしまうので、講師に恥をかかせる羽目になることもある。そこで教師は寝そうな生徒には寝ないように言い含め、必ず質問が出るようにサクラを決めておくなど、実は舞台裏で結構苦勞している。そういう苦勞とは縁のなさそうな若い JICA スタッフが、冷めた高校生をどう動かすのか、ここは一番、スタッフのお手並み拝見である。自分は手を汚さず、人のやることの批判だけするのはわれわれ教師の得意分野なのである。スタッフが困りはてたら、それ見たことかと助け舟を出せばよいぐらいの感覚で多寡をくくっていたのである

結論から言えば若き JICA スタッフの圧勝だった。ファシリテーターという発想に乏しいわれわれの完敗だった。20 年の教師経験があるといっても何にもならなかった。開発教育に必要なのはティーチャーではなくてファシリテーターであるという。ファシリテーターは評価という脅かしをちらつかせたり、正解を押し付けたり、考える力を奪ったりコントロールしたりしない、アドバイスすらしないのである。あくまでも生徒の自主性に任せ、極力、生徒の邪魔をしないのである。だから教師役ではなくて促進役であると位置づける訳である。これこそが開発教育のキーワードであると実感した。確かに生徒は授業中とは別人の顔をしていた。教師と似て非なるファシリテーターの手にかかると好きなことに没頭する子供のようないい表情をしていた。ファシリテーターも教師同様、指示はするし命令もする。時間制限も与えるし、タスクも多い。結構、意見発表も求めてきた。そういう意味では教師もファシリテーターも大差はないようだった。しかし、本質が違う。生徒は正解を求めて、教師の顔色を見たりはしない。見てもそこに正解はないからである。開発教育には、そもそも到達すべき決められた正解などはない。あの生徒の眼の輝きは何だったのか。自分の考えを自由に表現しても、それをとやかく言われない安心、それをニコニコ聞いてくれる促進役のスタッフの存在、言葉にはならないが広い世界に触れたものだけが持つ、あの圧倒的なスタッフの包容力、それらの中でこそ、生徒はのびのびと自分を表現したのではないだろうか。私は今回の大成功を以上のように分析してみた。

「これからの開発教育」であるが、私はわれわれ教師の中にファシリテーターの発想ができる人材を増やし、今まで教育に携わってきたノウハウを利用して既存の人材を育成すればよいと思う。そして教師自身が JICA 職員のように大きな視野の中に身をおき、教師として、ファシリテーターとして質の高い人材となればその集団が「これからの開発教育」を推進するエンジン部分になるのではないだろうか。そのためには、まず、外務省の予算付けを確保し、今回のようなプログラムを教師向けにアレンジして開発教育に携わりたいという希望

を持つ教師を育成し、JICA を通してアジア・アフリカなど日本とは圧倒的に価値観の違う国へ広く派遣すべきである。帰国後は、開発教育のできる教師の有機的なネットワークを構築し、教育全体にファシリテーターを広く供給できる体制を組めばよい。今回のプログラムで優秀な JICA スタッフを見て私が実感したのも人材育成こそが全てであるという結論であった。よって教師を積極的に派遣するための早急な条件整備こそが「これからの開発教育」を成功させる、最も具体的な方法だと確信する。たとえば経験 15 年以上の教師を 2 年間派遣するというような条件で、われわれ教師も海外青年協力隊並みの現地サポートが得られ、留守中の学校には非常勤講師を充当する予算も外務省から交付されるとなれば、安心して海外に出られるからである。学校現場としても帰国した教師の力でアジア・アフリカに太いパイプのある教育が提供できるとなれば大いにプラスだと思う。最後に若くして既に大きな視野を持つようになられた JICA スタッフに、改めて心から敬意を表し、このレポートとする。